

東京の  
名画散歩

はじめに・6

自分の美のスタンダードを  
「印象派」と「琳派」でつくるう・12

国際的な美術都市、TOKYO／印象派と琳派をわが友とする

**国立西洋美術館**

印象派の巨匠モネ、  
光と水の旅・18

西美、印象派の聖地／松方コレクションとは

モネと印象派の誕生前夜／ミレーの《春(タフニスとクロエ)》

クールベの《波》、あるいは宇宙人の眼／印象派のリーダー、ピサロ

モネ、天空の水の楽園／モネを見る美術館の旅

シヴェルニーに極楽浄土を見た／オランジュリーはモネ体感劇場

舟遊びとモネ8人の子供たち／川の旅人、モネ

ゴッホとゴーガン、出会いと別れ／象徴主義の画家、モロー

ふたたび松方コレクション返還の経緯／ミロとピカソ、現代の巨匠たち

レストラン「すいれん」にて

◆ 絵を見るときのコツ「ぶらぶら遠近法」



**ブリヂストン美術館**

ルノワール  
幸福の輝きを求めて・64

創設者、石橋正二郎のこと／女性美を讃嘆してやまないルノワール

国立西洋美術館のルノワール、この快作を見よ／再びモネへ、そして《黄昏、ヴェネチア》

ブルターニュ、美しき島への旅／ハウル・クレールあるいは温雅な悲しみ

日本近代洋画の宝庫、久留米の石橋美術館／カンティンスキー、抽象画の発明

◆ 絵を見るときのコツ「抽象画に開眼するとき」

**ポーラ美術館**

ルノワールとモネ、  
親友ニコに出会う・94

箱根の美しき宝石箱、ポーラ美術館／ルノワール、女性美への憧憬

コレクター鈴木常司の個性とは／モネと鈴木常司を結ぶもの／モネ、故郷ノルマンディーへの追慕

**パナソニック汐留ミュージアム**

ルオー、キリストの  
悲しみに救われる・114

ルオー、「われ、慈悲もて民を救わん」／恩師モローとルオーのきずな

歓喜とともにわが道を行かん／美術館の照明はかくありたい

青春白樺美術館

南アルプスのふもとで  
ルオーに邂逅する・130

ここはルオーの聖地でもある／よみがえるロマネスクのイコン  
聖書風景を追憶する

東京国立博物館 本館

日本美術、この国宝絵画の  
凄さを何と讚えよう・138

繰り出す国宝の数々、これを眼福と言わずして／永徳と等伯  
光琳と抱一／まだある、トーハクの遊び方、使い方

山種美術館

土牛と御舟――

桜と椿のものがたり・156

港区・青山に美術館通り誕生／山崎妙子館長、インタビュー  
奥村土牛と《醍醐》の桜／速水御舟と《名樹 散椿》

◆ 絵を見るときのコツ「美術館二周法のススメ」

出光美術館

仙崖の月、光琳の梅  
かっこいい江戸の美意識・174

出光佐三、仙崖の出会い／光琳、抱一、梅をめぐる旅／ルオーに挨拶して帰る  
◆ 絵を見るときのコツ「美術館に行くときの履物」

東京国立近代美術館

日本の洋画壇の  
歴史をたどる・186

東北のマテイス、萬鉄五郎のこの奔放な姿態を見よ／梅原龍三郎の《北京秋天》／古賀春江のシュールな《海》  
美術館の成立／横山大観《生々流転》／下村観山《木の間の秋》／上村松園《母子》  
◆ 絵を見るときのコツ「指で模写するエア・フィンガー法」

山梨県立美術館

ミレー、バルビゾンの祈りを  
山梨に見た・202

よくぞ美術館ができたものです／《落穂拾い、夏》、聖書を読んでわかる貧富の現実／《種をまく人》  
◆ 絵を見るときのコツ「美術展のキャッチフレーズ」

参考文献・213

むすびに代えて・214



## 国立西洋美術館

# 印象派の 巨匠モネの 光と水を 旅する

### 国立西洋美術館、印象派の聖地

パンダと動物園でにぎわう上野の森ですが、この一帯は、美術館、博物館、コンサート・ホールなどの林立する我が国最大のミュージアム・コンプレックスを構成しています。アメリカでいえばワシントンのスミソニアンに匹敵します。日本の文化の顔ともいえるべきこのエリアは、もっともつと評価されてブランド化されてしかるべきだと思ふのですが……。

その一角をなす国立西洋美術館は、JR上野駅の公園口を出たいちばん近いところにあつて、前庭にあるロダンの彫刻《考える人》でおなじみの方も多いでしょう。建物は緑色の岩おこしのような壁面のファサードと丸い列柱が特徴。20世紀の建築の巨匠、ル・コルビュジエの日本で唯一の作品としても知られ、この原稿を書いている

2013年冬現在、国立西洋美術館は、フランスやその他世界に広がるル・コルビュジエの作品とともに、フランス政府により一括して世界遺産に申請されています。

ところで、「もし無人島に1冊だけ本を持っていくことが許されるなら、いったい何を持っていくか」といった古典的な質問がありますね。その答えは人によって「聖書」であったり「芭蕉句集」であったり、はたまた「列車時刻表」であったり……。まあ、繰り返し立ち返って何度も何度も含蓄を味わえる心よりどころ、といったモノが選ばれます。そこで、この質問にも似て「もし一館だけ東京で美術館を訪ねることができたら、それはどこにするか」……。僕の場合、それは疑いもなくこの東京・上野の森にある「国立西洋美術館」(以下、西美=せいびと略称)です。



それはなぜかという点、中世から19世紀、20世紀に至る西欧美術の日本における宝庫であり、質量共に優れた作品群が、系統だった教育的な配慮に満ちた手法で展示されているからです。わけでもないこの美術館の持つ、クロード・モネをはじめとした印象派のコレクションは、国際的に見ても十分な競争力を持つまでに際だって圧巻です。なぜこのような奇跡のようなコレクションが我が国に成立し得たのか、物語に満ちた経緯は後ほど書くことにしますが、ともかく美の基準値として、自分の中に絶対的スタンダードをつくる場所として、西美ほどふさわしい場所はないと僕はかねてから思っていて、その確信はいまも揺らぐことはありません。

東京近辺に在住の美術ファンの方は、折に触れ上野方面に出た時にのぞいてみることをお勧めし

ようにして、この美術館を繰り返し訪れるのもいいものです。東京にひいきの美術館を持っているなんて素敵ではないですか。僕は多くの若い友人達や地方の人にもそういつてお勧めしています。

さて、それでは実際に西美の館の中に入ってみましょう。一般420円で常設展の切符を買います(家族で行っても安いです)。ついでに言っておくと、常設展は65歳以上は無料です。コルビュジエお得意の軽快なピロティを通り、ロビーから「19世紀ホール」と呼ばれる彫刻の部屋に向かいます。ちなみに同じ1階のロビーやレストラン、ミュージアム・ショップなどはチケットなしで自由にアクセスできます。

1階の「19世紀ホール」で、ロダンの《青銅時代》などのいくつかの彫刻を見に来ます。天井のトップ・ライトから差し込む自然光が作品を柔

ます。常設展だけでも、実に見事なコレクションです。たとえ1時間でもよりすぐった近代代の美術作品に眼と脳をそよがせると、僕などは何かめきめきとリフレッシュされるのを感じます。何なのでしょね、この感じ……。ふだん言葉や数字で生き過ぎていくせいなのか、ロジックにならない絵画に出会って、アタマがリセットされ、ストレッチをした後のような健康でリラックスした快い状態に引き戻されるのを感じするわけです。

ところで、東京以外の方も、出張や親戚の結婚式などといった上京の機会が多い方も結構あるのではないのでしょうか。そんなとき、ちよつとしたスキマ時間を見つけて西美に出かけるのも、東京のぜいたくのひとつです。スカイツリーや新しいファッション・ビルの探訪もあるでしょうが、まるで行きつけのお気に入りレストランや飲み屋の

らしく浮かび上がらせています。そのあとは、壁に沿ったスロープを上って折りかえし、2階の絵画のフロアにアクセスします。コルビュジエらしい導線の設計です。開館したのは1959年ですが、この時代にしてすでに打ちつばなしの壁面、特徴的なピロティや室内バルコニーなど、内外装ともに今日の眼で見てもモダン・デザインの生き生きとした知的刺激が伝わり、コルビュジエの初々しいまでの気持ちい今も鮮やかです。

### 松方コレクションとは

さて、日本最高峰の印象派の殿堂はどのような経緯で生まれたものなのか。その歴史はまことにドラマティックです。

西美の収蔵品の母胎は、松方コレクションです。松方とは、明治の首相も務めた松方正義の三男に



ス。ここからは眼下の1階にミロやデュビュッフェなどの現代美術が展示されているのがうかがえて、これからの美術を巡る旅のエピローグの楽しさを早くも予感させる構造になっています。設計はコルビュジエの弟子の前川國男でした。本館でコルビュジエが作った室内バルコニーをうまく引用しながら反復しています。敬慕する師匠の作品と一体化して増築する建物を自ら設計できることの喜びにあふれ、師に対するオマージュとなっているのも、建築が好きな方には見逃せないポイントです。実際この部屋にたずねてみると、高い天井に円形の照明が幾何学的に配されて知的なエレガンスと品格があり、さえざえとした明るさは実に心地いい。そしていつも訪れるたびに感じるのですが、床掃除のワックスの匂いなんだろうが、とても清潔で気分の高揚する匂いで迎えられるのです。

### ミレーの《春(ダフニスとクロエ)》

どれから見てもいいのですが、この部屋で普通最初に目にはいるのはミレーかも知れません。信仰深い農民の姿を描いたバルビゾン派の作家として知られ、《種をまくひと》は岩波書店のロゴマークとしてすっかりおなじみ。ところがそのミレーに、こんな作品があるうとは。

古代ギリシヤの小説を元にした《春(ダフニスとクロエ)》。実はこの二人とも、牧人夫妻に育てられている捨て子です。偶然にも落ちてきた小鳥の巢の雛たちに餌を与えるのに余念のない少年と少女！少年は羊飼いであることを示す杖と、少女にあげるつもりの摘んだ花を帽子に入れて傍らにおいています。少女はまだ胸のふくらみも足りない年齢。牧歌的ロマンがあふれ、春は到来すれ



《春(ダフニスとクロエ)》  
ジャン・フランソワ・ミレー 1865年  
松方コレクション  
国立西洋美術館

ど人生の春を迎える少年少女は無垢で恋の恐れも傷つくこともまだ知らない。ミレーの解釈力と構成力の巧みな手腕。見るものが、甘酸っぱい思い出とともに癒しやよみがえりを体感できる絵です。作家であるロンゴスのストーリーでは、やがてこの二人は苦難を乗り越え結婚します。

ちなみにこの絵は《四季》と題を付けた姉妹作のひとつ。《春》がこの国立西洋にあり、そして《夏》をフランスのポルドー美術館が所有。《秋》は焼失し、《冬》が幸運にも我が国の山梨県立美術館に収蔵されています。《冬》の別名が《凍えるキューピッド》。冬の凍りつく雪つもる街を、可憐なキューピッドが裸で歩いている。それを温かい家庭に招き入れようとする老人と若い女性。有り得ない奇抜ともいえるストーリー展開なのですが、紀元前6世紀のギリシャの詩人アナクレオンの物語を元にミレーが画面を構成した絵です。こんな

に心をつかまれる絵をあまり他に見たことがありません。

この後キューピッドは温かい暖炉の前でもてなされるのでしょうか、それとも暖かいバスタブに入れてもらうのでしょうか。それはともかく、普通、「山梨県立美術館」へミレーを見に行くと言ったら、お目当てはやはり《種をまく人》や《落ち穂拾い》でしょうが、こんな隠れた名品を発見するのも美術館探訪の喜びです。

それにしても、ミレーの物語作家としての才能には舌を巻きます。あらかじめ物語のシーンを頭の中で何度も組み立て、周到にイメージし、その上で初めて絵筆を取っているのではないか、そう思わざるを得ません。

ミレーは19世紀の中葉、パリ近郊、バルビゾン



《冬(凍えるキューピッド)》  
ジャン・フランソワ・ミレー 1864-65年  
山梨県立美術館



access

## 国立西洋美術館

**所在地：** 〒110-0007 東京都台東区上野公園7-7

**開館時間：** 09：30～17：30（冬期は～17：00）金曜日は20：00まで  
※入館は閉館の30分前まで

**休館日：** 月曜日（休日の場合は翌火曜日） 年末年始、臨時休館

**問い合わせ：** ハローダイヤル：03-5777-8600

**常設展観覧料：** 一般420円(210円) / 大学生130円(70円) /  
高校生以下及び18歳未満、65歳以上、  
心身に障害のある方及び付添者1名は無料  
（学生証が年齢の確認できるもの、障害者手帳の提示が必要）  
※（ ）内は20名以上の団体料金

**無料観覧日：** 毎月の第2、第4土曜日と文化の日（11月3日）但し常設展のみ

**アクセス：** JR上野駅下車（公園口出口）徒歩1分  
京成電鉄京成上野駅下車徒歩7分  
東京メトロ銀座線、日比谷線上野駅下車徒歩8分  
URL：<http://www.nmwa.go.jp/>